

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：32677

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370461

研究課題名(和文)ドイツ語転換動詞の形態・意味機能・統語機能の相互関係に関する通時的研究

研究課題名(英文) Diachronic investigation on interaction among form, semantic function, and syntactic functions of converted verbs in German

研究代表者

黒田 享 (KURODA, Susumu)

武蔵大学・人文学部・教授

研究者番号：00292491

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ドイツ語の名詞や形容詞から派生された動詞の形態・意味・統語的機能の関係を長期の歴史的变化に沿って調査した。

現代ドイツ語では、bewaffnen<武装する>やentleeren<空にする>など、名詞や形容詞から派生された動詞の多くが接頭辞を伴う。本研究では、これが中世ドイツ語においては目立つ現象ではないこと、そして、与奪の対象や位置を表す名詞からの動詞派生と形容詞からの動詞派生において段階的に接頭辞の利用が増えてきたことを明らかにした。ドイツ語では、こうした動詞派生において接頭辞が派生手段の一部になる歴史的变化があったと考えられる。

研究成果の概要(英文)：This research was an investigation on the relationship between the form, meaning and syntactic function of verbs derived from nouns and adjectives in German through a long period of historical development.

In modern German, many of the verbs derived from nouns and adjectives such as 'bewaffnen' <to make armed> and 'entleeren' <to make empty> are provided with a prefix. It was revealed in this research that this is not a conspicuous phenomenon in medieval German and that the use of prefixes has increased gradually in verb derivation from nouns expressing subjects of giving/taking or locations and from adjectives as well. In German, it seems that there was a historical development in which the prefix became part of derivation means in such verb derivations.

研究分野：ドイツ語学

キーワード：ドイツ語史 古高ドイツ語 中高ドイツ語 ドイツ語形態論 ドイツ語語形成論

## 1. 研究開始当初の背景

ドイツ語には *Schauspieler* (俳優) → *schauspielern* (俳優として活動する) や *kurz* (短い) → *kürzen* (短くする) のように、名詞や形容詞から派生した動詞が数多くある。このような動詞形成は英語でも見られ、「転換 (Conversion)」として多くの研究者が取り組んできた。中心となるのは Marchand (1960) 以来の英語の転換についての詳細な議論だが、転換による動詞派生は言語類型論にまで広がりうるトピックであり、日本国内でも影山 (1980) を始めとして多くの研究者が英語・日本語の転換動詞研究に取り組んでいる。

Marchand はドイツの英語学者であり、その転換動詞研究はドイツ語語形成研究にも影響を与えた。現代ドイツ語については Wellmann (1973) による大規模な記述研究がある他、Olsen (1986)、Stiebels (1996) などを始めとする理論的議論も積み重ねられている。ドイツ語転換動詞研究の特徴は、その対象が現代語に限られず、Schaefer (1984)、Kaliušcenco (1988)、Habermann (1994)、Riecke (1996)、Prell/Schebben-Schmidt (1996) や Leibold (2006) など、過去のドイツ語についても研究されていることである。また、後述するように通常は転換と見なされない接頭辞を伴う動詞派生も並行して論じられるのもドイツ語の転換動詞研究の特徴である。

だが、研究開始時点では古高ドイツ語期の転換動詞についてコーパスに基づいた包括的記述がなく、古高ドイツ語以来の歴史的背景は明らかでなかった。研究代表者は以前、古高ドイツ語の授与・装備動詞に関する小規模な研究を行っていたこと (Kuroda (2010)) から、それを出発点にして、ドイツ語における動詞転換の歴史を体系的に俯瞰する研究を着想した。

## 2. 研究の目的

本研究においては、ドイツ語転換動詞の形態と意味機能・統語機能の相互作用の通時的調査を主たる目的とした。

転換動詞はいくつかのタイプに分類可能である。特に名詞から派生された動詞については派生源名詞が担う意味的性質に従う分類が広く見られる。上述の *schauspielern* (俳優として活動する) は派生源名詞が主語の性質や特徴を表し、「動作主動詞」と性格づけられる。他にも「出産動詞」(*Kalb* (子牛) → *kalben* (子牛を産む) など派生源名詞が被生産物を表す)、「授与・装備動詞」(*Sattel* (鞍) → *satteln* (鞍をつける) など派生源名詞が目的語に付されるモノを表す)、「位置動詞」(*Land* (地面) → *landen* (着陸する) など派生源名詞が位置を表す)、「道具動詞」(*Schaufel* (シャベル) → *schaufeln* (シャベルで掘る) など派生源名詞が道具を表す)などのタイプが挙げられる。転換動詞はタイプごとに特定の統語機能 (動詞の結合価) や特定の形態的特徴 (接頭辞の有無や選択) と親和性が高いことがある。本研究が第一に目指したのは、こうした現象の通時的視点からの捕捉である。

本研究では特に長期間にわたる変遷のあり方に焦点を当てる。上述のように、ドイツ語転換動詞の研究においては通時的変化も視野に入っているが、個々の研究における焦点はドイツ語の特定の発展段階に置かれるのが常で、通時的変遷は中心的には議論されてこなかった。これは、現代ドイツ語とは大きく異なる古高ドイツ語期の状況についての体系的な調査がなかったことも一因であるだろう。本研究では、特に古高ドイツ語の転換動詞の振る舞いを包括的に捉えることでこの研究上の間隙を埋めると共に、ドイツ語転換動詞のあり方の変化を長期的な視野で理解することを目指した。

本研究では、英語やスウェーデン語との比

較も行うこととした。これらの言語における転換動詞は、ドイツ語のそれとは異なった性質を持つ。言語系統的に近接した言語であるにも関わらず差異が存在する背景には、歴史の変遷を明らかにすることで理解できるようになるものもあるだろう。また、他言語との比較によってドイツ語転換動詞の特徴がより際立つことも期待できる。

### 3. 研究の方法

研究はまず古高ドイツ語から開始した。研究対象の確定のため、中世ドイツ語形態論研究の近年の研究成果を反映する Bergmann (1991)、SpLett (1993)などを参考に、まず古高ドイツ語の名詞・形容詞由来の転換動詞として認められる動詞を選定した。

上述のように、古高ドイツ語の状況については先行研究が不十分であるため、一次資料からコーパスを構築し、研究対象として選定した転換動詞の用例を網羅的に採集した。用例のデータベースに基づく分析を容易にするため、コーパス構築は電子データの形式で行った。コーパス構築に用いたのは次に挙げるテキストである。

- ・ Isidorus Hispaliensis によるラテン語文書の古高ドイツ語翻訳 (9世紀初め)
- ・ Tatianus Syrus によるラテン語福音書の古高ドイツ語翻訳 (9世紀前半)
- ・ Otfrid von Weissenburg による古高ドイツ語文芸作品『福音書』(9世紀後半)
- ・ Notker Labeo のいくつかの古高ドイツ語著作 (10世紀後半～11世紀初め)

こうして構築したコーパスを網羅的に調査して古高ドイツ語転換動詞の用例を採集した後、データベース化した。その際、Riecke (1996)や Leipold (2006)、Kuroda (2010)、Fleischer/Barz (2012)などにおいてなされてきた議論を参考に、動詞の形態(接頭辞との関係)及び意味機能(転換動詞タイプ)・統語機能(項構造)の相互関係を分析できる形式にするよう留意した。その上で古高ドイ

ツ語の動詞転換に伴う文法現象を捕捉・分析した。

次に、中高ドイツ語の動詞転換についても同様の調査を行った。中高ドイツ語期以降の動詞転換に関しては Habermann (1994)、Prell/Schebben-Schmidt (1996)、Leipold (2006)のような詳細な研究が参考にできる。本研究では、多様な中高ドイツ語実用文書がまとめられ、二次資料も充実している Corpus der altdeutschen Originalurkunden を中心的資料として用いることとした。まず、ここに現れる名詞・形容詞由来の転換動詞を選定し、用例データベースを作った。その上で、古高ドイツ語の場合と同様に転換動詞の形態・意味機能・統語機能の相互関係を分析した。また、古高ドイツ語から中高ドイツ語を経て現代ドイツ語に至る変化も調査した。この作業においては、Marchand (1964)、Marchand (1969)、Wellman (1973)や Erben (2006)、Fleischer/Barz (2012)などの研究を参考にした。

なお、調査・分析の成果は研究の中間段階であっても適宜発表することで他研究者との議論の俎上に乗せて検証し、以降の研究にフィードバックすることとした。

ドイツ語についての調査の後、ドイツ語と同じくゲルマン語である現代英語と現代スウェーデン語の転換動詞に見られる形態・意味機能・統語機能の相互関係を文献資料に基づいて調査した。もともと、転換動詞研究は英語・ドイツ語・オランダ語については詳細に行われているが、北ゲルマン語の転換動詞については資料が比較的少ない。そこで、辞書記述に基づいてスウェーデン語基礎語彙に含まれる転換動詞を独自にデータベース化し、その形態・意味機能・統語機能を調査した。これを通じて英語・ドイツ語・スウェーデン語における転換動詞の形態と機能の相違点を明らかにし、それと関連しうるドイツ語の通時的変化との関連を考察した。

#### 4. 研究成果

研究期間においては、古高ドイツ語以来のドイツ語転換動詞の形態と意味機能・統語機能の変遷を捉えることに取り組んだ。また並行して、語形成理論との関連からドイツ語文法体系における動詞転換の位置付けについても研究を進めた。

上述のように、本研究は中間的成果を適宜発表し、特に国外の関連分野の研究者との意見交換を通じて検証しながら段階的に研究を進める方法をとった。これは、ドイツ語史、特に語形成論分野の研究者が国内に極めて少なく、国内では議論の機会が限られているからである。研究期間中には海外において4回研究成果を発表し、それを通じて関連領域の専門家と活発に意見交換をすることができた。特に多くの著名研究者が参加する *Societas Linguistica Europaea* や *Gesellschaft für Germanistische Sprachgeschichte* による研究集会での研究発表では他の参加者から多くの示唆を得ることができ、研究の精度が大きく向上した。

また、かねてから共同研究を行っているベルリン・フンボルト大学 Karin Donhauser 教授、ジェローナグラ大学 Michail Kotin 教授、パッサウ大学 Hans-Werner Eroms 名誉教授などとも適宜意見交換を行い、研究の充実につなげることができた。特に、ベルリン・フンボルト大学を中心として構築された *Referenzkorpus Altddeutsch* の利用が可能になったことは意義深い。これによりデータ採集・分析の効率・精度が飛躍的に向上し、研究が大きく前進した。

研究の過程では語形成理論における議論にも取り組んだが、とりわけ近年、Booij を始めとする研究者によって展開されている「構文形態論 (Construction Morphology)」の枠組みは本研究で取り上げる現象の説明に有益であることがわかった。この枠組みの援用によって、特に「転換」概念について理

解が深まった。転換という派生操作は伝統的に、*Ehre* (名誉) → *ehren* (讃える) のような、接辞を伴わない動詞の派生のことを指す (Vogel 1996)。すなわち、*billig* (廉価な) → *verbilligen* (値段を下げる) のように名詞・形容詞からの動詞派生であっても、接頭辞を伴うものは転換とされないのが通常だ。しかし、この場合、接頭辞 *ver-*がないと形容詞 *billig* から対応する動詞を作ることができない。つまり、*ver-*はいわば動詞派生に必須の要素であり、ここでは動詞派生手段の一部として機能していると言える。ドイツ語ではこうした動詞派生がかなり見つかるが、この現象は構文形態論の枠組みでは、複数の形態素 (ここで挙げる例では接頭辞ともともと名詞から動詞を派生するような動詞末尾要素) が語形成要素として一つのユニットを作りうるという考え方 (Unification) を用いて捉えることが可能だ。言い換えると、*billig* → *verbilligen* のような動詞派生は接頭辞を用いない動詞派生と語形成機能上は差がない。「転換」の概念を接頭辞が伴わないケースに限ることは再考の余地があるだろう。このことは、動詞派生に用いられる形態素の機能の「希薄化」の問題にも繋がりをうる。

また、上述したように現代ドイツ語では、名詞から派生された動詞はタイプごとに接頭辞との関係が異なる。動作主動詞、出産動詞、道具動詞は接頭辞を伴うことが少ないが、授与・装備動詞は非分離接頭辞を伴うことが多い (*Waffe* (武器) → *bewaffnen* (武装する) など)。また、位置動詞は分離接頭辞との親和性が強い (*Tisch* (机) → *auf-tischen* (食卓に上げる) など)。一方、形容詞からの転換の場合は非分離接頭辞の使用がほぼ必須である (*leer* (空の) → *entleeren* (空にする) など)。

こうした現象は英語やスウェーデン語ではドイツ語ほど顕著ではない。また、中世ド

イツ語の名詞・形容詞からの動詞派生においても、接頭辞は現代ドイツ語ほど目立たない。現代ドイツ語の状況は、近世において名詞・形容詞からの動詞派生の際に接頭辞が果たす役割が重要になったためであると言える。そしてこの変化の有無が英語・スウェーデン語との違いを生んだ背景であるのではないか。

研究の過程では、名詞・形容詞からの動詞の派生に関わる様々な問題点の存在が明らかになった。例えば、動詞派生における接頭辞利用の有無は、派生源要素の形態とも関連している。例えば、*reif*〈熟した〉→*reifen*〈熟す〉に見られる単純な構造を持つ要素からの動詞派生の場合と異なり、*langsam*〈遅い〉→*verlangsamen*〈遅くする〉のように派生源要素の構造が複雑な場合は接頭辞を用いないと動詞への派生が難しい (Olsen 1990) が、この現象の歴史的背景は解明できなかった。また、転換動詞のグループ分類のあり方についても明確な回答が出せなかった。こうした問題については今後、より踏み込んだ研究が必要である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

[1] Susumu Kuroda "Formen der ornativen Verben." Jahrbuch für Germanistische Sprachgeschichte 8. 査読有 2017 年 印刷中

[学会発表] (計 7 件)

[1] 黒田 享 「古高ドイツ語脱名詞動詞の形成法」日本歴史言語学会 2016 年 11 月 20 日 九州大学 (福岡県・福岡市)

[2] 黒田 享 「派生形態素の機能希薄化」ポスター発表 日本歴史言語学会 2016 年 11 月 20 日 九州大学 (福岡県・福岡市)

[3] Susumu Kuroda "Formen der ornativen Verben" Gesellschaft für Germanistische Sprachgeschichte 2016 年 9 月 22 日 ライプツィヒ (ドイツ連邦共和国)

[4] 黒田 享 「中高ドイツ語過去表現の『口語性』」日本歴史言語学会 2014 年大会 2014 年 11 月 30 日 国立民俗学博物館 (大阪府・吹田市)

[5] Susumu Kuroda "Kopulatives *wesan* und die konkurrierenden Formen im Althochdeutschen" Societas Linguistica Europaea, 47th Annual Meeting 2014 年 9 月 14 日 ポズナン (ポーランド共和国)

[6] Susumu Kuroda "Ornate Verben und ihre Struktur" 招待講演 2013 年 10 月 25 日 トウルク (フィンランド共和国)

[7] Susumu Kuroda "bemerkelt, betwittert, bejeanst - aktuelle Verbbildungen im Deutschen aus sprachhistorischer Perspektive" Grünberger Germanistische Begegnungen 招待講演 2013 年 10 月 21 日 ジェローナグラ (ポーランド共和国)

[図書] (計 3 件)

[1] Susumu Kuroda, Stefanie Dipper, Elvira Glaser et al. *Glossarium amicorum* Institut für deutsche Sprache und Linguistik, Humboldt-Universität zu Berlin 2016 年 290 頁 (163 頁-168 頁) (Otfrid von Weißenburg)

[2] Susumu Kuroda, Michail L. Kotin, Werner Abraham, Ana Maria Barbu, Piotr Bartelik, Liisa Buelens, Jac Conradie, Piotr Krycki, Elisabeth Leiss, Rosemarie Lühr, Akio Ogawa, Monika Schönherr, Igor Trost, Sonja Zeman *To be or not to be? The Verbum Substantivum from Synchronic, Diachronic and Typological Perspectives* 2015 年 368 頁 (163 頁-180 頁) (Chapter 4: "Competing Forms of Copulative *wesan* in Old High German)

[3] Susumu Kuroda Universitätsverlag  
Winter *Die syntaktische Funktion der  
Präfigierung im Althochdeutschen* 2014 年  
338 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

黒田 享 (KURODA Susumu)

武蔵大学・人文学部・教授

研究者番号：00292491